

三重県桑名市

寺跡遺跡発掘調査報告書

桑名市公共下水事業敷設事業大福幹線

江場五丁目末端汚水管路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2004.3

桑名市教育委員会

例　　言

- 1 本書は三重県桑名市大字大福字寺跡に所在する寺跡遺跡（市遺跡No.130）の発掘調査報告書である。
- 2 現地での調査は平成14年9月5日から12月16日にかけて実施した。
室内での整理作業は平成15年4月1日から平成16年3月10日にかけて実施した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

調査主体	桑名市教育委員会
調査員	平野亜紀（桑名市教育委員会）＊調査担当 水谷芳春（桑名市教育委員会） 斎藤理（桑名市教育委員会）
調査参加者	宮嶋克明、岩間昭道、奥田崇晃、吉井理恵、安達靖人（以上愛知学院大学学生）、柴田涼子、水谷吏江、大杉規之、後田将志、水谷憲二
- 4 調査のうち現地作業及び、遺物の洗浄・分類等は桑名市教育委員会が実施し、報告書作成業務（遺物実測、写真撮影、図版作成、自然科学分析等）をアイシン精機株式会社に委託した。
- 5 本報告は斎藤理、水谷芳春、平野亜紀、植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）、山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ）、黒澤一男（株式会社パレオ・ラボ）が執筆した。執筆分担は次に記した。全体の編集は柴田涼子、水谷吏江、大杉規之の協力を得て平野が行った。
- 6 発掘調査及び本書の作成過程において、下記の機関、方々にご指導、ご協力をいただいた。
記して感謝の意を表す。（敬称略）
桑名市建設部下水道課、日本興業株式会社、株式会社クックス、宇佐美隆之（滋賀大学）、尾野義裕（京都国立博物館）、松蔭斉（愛知学院大学）
- 7 調査に関する記録及び出土遺物等の諸資料は桑名市教育委員会で保管している。

目 次

第1章	位置と環境	（齊藤 理）	1
第2章	経緯と経過	（水谷芳春）	1
第3章	遺構	（平野亜紀）	2
第4章	遺物	（齊藤 理）	5
第5章	自然科学分析		
第1節	木製品の樹種	（植田弥生）	8
第2節	放射性炭素年代測定	（山形秀樹）	11
第3節	動物遺体	（黒澤一男）	13
第6章	まとめ	（齊藤 理）	15

表目次

表1	遺物観察表（1）	21
表2	遺物観察表（2）	22
表3	木製品の樹種同定結果	23
表4	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果	24
表5	試料別貝類出土量	24
表6	試料別骨出土量	24

図版目次

図版1	調査地点位置図	27
図版2	調査区位置図	28
図版3	調査区平面・土層断面図	29
図版4	調査区土層断面図	30
図版5	遺物実測図	31
図版6	遺物実測図	32
図版7	遺物実測図	33
図版8	遺物実測図	34

写真図版目次

カラー写真図版1	37
カラー写真図版2	39
写真図版1 調査区、調査区壁、遺構	41
写真図版2 出土遺物	43
写真図版3 木製品樹種の光学顕微鏡写真	45
写真図版4 木製品樹種の光学顕微鏡写真	47
写真図版5 土木製品樹種の光学顕微鏡写真	49
写真図版6 貝類	51
写真図版7 動物遺体	51

第1章 位置と環境

本遺跡は桑名市大字大福字寺跡に所在する。発掘調査地点は桑名市大字大福字寺跡418-2番地先である。

本遺跡が属する桑名市は東に揖斐・長良川が、南には員弁川が流れ伊勢湾に注ぐ。北西には養老山脈の東南端にあたる丘陵が展開する。本遺跡は揖斐・長良川によって形成された沖積地上に立地する。

本遺跡は平成5・6年度に実施された桑名市遺跡詳細分布調査において新たに発見された遺跡である。この調査では山茶碗、近世陶器が採集されており、鎌倉時代から江戸時代にかけての遺跡と推定されている。周辺の沖積地には中野遺跡、江場貝戸遺跡、東之島遺跡、勢以口遺跡、矢田縄遺物散布地、若田縄遺跡等遺跡が点在する。これらはいずれも中世に成立する遺跡と考えられ、本遺跡が立地する揖斐・長良川河口域の沖積地は標高も低く、河川の氾濫を考慮しなくてはならない地域と思われるが、中世段階である程度安定した微高地が点在していたものと考えられよう。

近世になると本遺跡の北東には近世の城郭である桑名城の築城に伴う、いわゆる「慶長の町割」によって整備されたとされる桑名城下町がある。近年の調査によって、近世における桑名城及び桑名城下町の様相も次第に明らかになりつつある。

第2章 経緯と経過

桑名市教育委員会は平成14年度実施の公共下水道敷設事業のうち、大福幹線江場五丁目末端汚水管路施設工事が、周知の遺跡である寺跡遺跡（市遺跡No.130）の範囲内であることから、桑名市建設部下水道課と遺跡の取り扱いについて協議をおこなった。

管路施設工事は、下水管管理のため掘削を伴うもので、掘削深度から遺跡に影響を及ぼす可能性があった。その後、数度の協議を行ったが工法変更が困難であることが確認されたため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査は掘削範囲が狭長であることや、周辺の試掘・立会調査の結果等から遺構が存在しない可能性が高かったこと等から、工事の進捗状況にあわせた立会調査を実施することとした。

桑名市長水谷元より、平成14年6月14日付下第98号で文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を受けた市教育委員会では、文化課文化振興係学芸員平野亞紀を調査担当として発掘調査に着手した。三重県教育委員会に対する埋蔵文化財発掘調査着手の報告は、文化財保護法第58条の2第1項に基づき、平成14年10月18日付教文第90号の5にて行った。

現地での調査は平成14年9月5日から開始した。調査は下水管が埋設される幅1m、深さ約3m～1.6mのトレーニング状の工事予定地の立会調査を行うもので、工事の性格上、一ヵ所での調査にあてられる時間に制約があった。また、バックホーで掘削後、壁面の崩壊を防ぐため直ちに簡易矢板で補強し、管を埋設するため、長距離にわたって精密な土層断面図を作成することが困難であった。よって調査は断面観察と写真撮影及び遺物採集に限定せざるを得なかつた。

結果として性格が厳密に把握できる遺構は検出されなかつたが、礎石と考えられる上面を平坦に保つた礎と、柱と考えられる木材、また、中世及び近世の遺物包含層等が確認され、遺物包含層を中心に中世から近世にかけての陶磁器類の出土をみた。これら出土遺物は、図版2に示したグリッド毎に取り上げを行っている。

現地調査終了後、水洗洗浄、接合等の整理作業を平成14～15年度にかけて行い、報告書の作成は平成15年度に行つた。遺物の実測、写真撮影等、また木製品や貝・魚骨の分析、レイアウト及び印刷等の報告書作成業務についてはアイシン精機株式会社に委託した。

第3章 遺構

調査は全長229m、幅1mの工事予定地のほぼすべてを対象とした。掘削の結果、近現代に大きく搅乱されている部分もあったものの、中世及び、近世と考えられる遺物包含層と、中世と考えられる遺構が確認された。

土層は地点により様相が異なるため、特徴的な11箇所を抽出し、それぞれ土層図を作成した。土層図を作成した箇所は西からA、B、C…地点とした。すべての地点で中世の遺物包含層が確認でき、遺構はG及びI地点にて検出された。地点毎の層位、検出遺構等の詳細は以下に記す。

〈A地点〉

歩道を整備した際のアスファルト、碎石、近年の盛土（1、2層）の直下から遺物包含層（3、4層）が検出された。遺物包含層は暗灰色粘質土層（3層）と暗灰褐色粘質土層砂混（4層）で、いずれも中世の遺物が出土した。さらに下層にあたる灰色砂層（5層）からは遺物が出土せず、激しい湧水が見られた。

〈B地点〉

歩道を整備した際の盛土の他に、塩化ビニール管の埋設等により搅乱を受けている。遺物包含層は暗灰褐色粘質土層砂混（5層）とその下層の暗灰褐色粘質土層砂混（6層）である。6層には鉄分が多く含まれている。さらに下層の青灰色粘質土層（7層）からは遺物は出土しなかつた。

〈C地点〉

歩道整備の際の盛土（1～4層）が地表面より厚く堆積している。その下層の暗青灰色粘質土

層（5層）からは近世の遺物が若干出土している。暗灰褐色土層砂混鉄分多（6層）からは中世の遺物が出土している。

その他、C地点からは柱と考えられる木材の出土が検出されている。バックホーによる掘削中に残存長110cm、長径39.2cm、短径26.5cmの木材が、暗青灰色粘質土層（5層）の上面にて垂直に立った状態で検出された。これは垂直に立て検出された事、また、下部が工具にて形成されており、上部は廃棄後に欠損したと思われる状態であることなどから、柱と判断したものである。また、この柱の東で礎石らしき礎が1基検出面にて確認された。これは上面を平坦にした人頭大のものである。

〈D地点〉

歩道を整備した際のアスファルト、碎石のほか、近年に搬入された砂層により搅乱を受けている（2～4層）。中世の遺物包含層は暗黒褐色粘質土層（5層）とその下層の暗灰褐色粘質土層貝混（6層）でいずれも有機質である。6層はハマグリ等の破碎貝を若干含んでおり、松葉、松笠等が大量に出土している。

〈E地点〉

歩道整備の際のアスファルトと碎石、盛土（1、2層）の下層に廃材を含んだ搅乱（3層）が厚く堆積している。遺物包含層は灰褐色を呈する4～7層で、そのうち6層からは松葉、松笠が多く出土している。暗黒褐色粘質土層（8層）からは遺物は出土しなかった。

〈F地点〉

歩道整備の際のアスファルトと碎石、盛土（1、2層）の下層に、廃棄された棟瓦の堆積が認められた（4層）。これはガラス片を含むもので近年の搅乱と考えられる。遺物包含層はさらに下層の灰褐色を呈する粘質の土層（5～7層）である。同様に8層も灰褐色粘質土層であるが遺物の出土は見られなかった。

〈G地点〉

歩道整備時のアスファルト、碎石、盛土（1～3層）が厚く堆積している。遺物包含層は4～7層である。7層は極めて有機質で、焼土粒を含んでいる。

遺構は8層の上面にて柱穴を6基検出した。工事の掘削深度が8層以下に及ばないため、遺構掘削を行わなかった。深さは不明であるがすべて同規模であり、直径約0.2mを測る。調査区が狭小なため配列などは不明である。

〈H地点〉

歩道整備時のアスファルト、碎石、盛土（1～3層）の下層に近代の陶磁器が出土する搅乱（4層）が認められた。遺物包含層はさらに下層の5～7層である。6層は青灰色を呈する粘質土中に、ハマグリを中心とした貝類が認められる混貝土層である。調査区が狭小であるため現時点ではこの堆積層の性格は不明であった。そこで6層中に含まれる貝類の性格を明らかにするために、サン

ブルの採取を行っている。サンプル内に含まれた動物遺体の同定結果等については第5章第3節を参照されたい。

(I) 地点

歩道整備の際の碎石、アスファルトの下層が大きく搅乱を受けていた。遺物包含層はさらに下層の灰褐色粘質土層砂混（3層）及び、灰褐色粘質土層（4層）である。

4層上面では土坑1基、溝1条、溝に沿った横板を伴う杭を検出した。

土坑は調査区外に延びるため平面プランは不明である。現況で最大幅1m30cmを測る。工事の掘削が及ぼないことから遺構掘削は行わなかつたため性格等も不明である。検出面での観察から、埋土は5～10cmの完形のものを中心としたハマグリの多く混じる青灰色粘質土層である。

溝は幅約30cmで、南北に延びる。調査区外に及んでいるため、全長は不明である。工事の掘削深度が及ぼないため遺構掘削を行わなかつた。深さ等も不明である。検出面での観察から埋土は土坑と同様に貝の多く混じる青灰色粘質土層である。貝は2～5cmの完形のものを中心としたアサリ・シジミ等で構成されている。横板を伴う杭は溝に平行に接して検出された。

いずれの遺構も掘削していないため、時期などの詳細は不明であるが、土層の堆積状況、また、遺物包含層からの遺物出土状況等から、中世の遺構である可能性が高い。

(J) 地点

歩道整備の際のアスファルト、碎石の下層に塩化ビニール管の埋設された搅乱層が厚く堆積していた。遺物包含層は暗灰褐色粘質土層砂混（3層）及び、灰褐色粘質土層破碎貝混（4層）である。

(K) 地点

歩道整備の際のアスファルト、碎石、盛土（1、2層）の下層に搅乱層（3層）が堆積している。

遺物包含層は暗灰褐色土層破碎混（4層）である。これより下層からは遺物は出土しなかつた。

第4章 遺物

遺物は包含層を中心に山茶碗、陶器、土師器、瓦器、輸入磁器、瓦、金属製品、木製品が出土している。遺物の取り上げは国家座標に基づいて設定した50m×50mのグリッドによって行っている。X軸は1、2、3、…、Y軸はあ、い、う、…とし、南東の交点をもって地区名とした。

以下に特徴を記す。法量等の詳細は遺物一覧表を参照されたい。

山茶碗（図版5-1～9）

山茶碗は椀が8点（No.1～8）、小皿が1点（No.9）の計9点が出土している。すべて東海地方南部系のいわゆる荒肌手のものである。

1は色調は暗灰白色、胎土は長石を含んだ粗雑なもので、内面体部に降灰する。外面底部には糸切痕が残り、高台内外には高台貼り付けに伴う回転ナデ、高台裏には粗穀痕が認められる。内面には使用痕があり、内面底部と内面体部の境を中心で黒色の煤が付着している。2は色調は灰白色、胎土は長石を含む粗雑なもので、高台内外に貼り付けに伴うナデがある。内面には使用痕がある。3は色調は灰白色、胎土は長石、石英を含む粗雑なもので、高台は剥落し、外面底部にその痕跡が残る。内面には使用痕がある。4は色調は暗灰白色、胎土は長石を含む粗雑なもので、内面底部に弱い指圧痕がある。外面底部には糸切痕があり、高台内側にのみ貼り付けに伴う回転ナデが認められる。高台裏には粗穀痕が残る。内面底部と内面胴部下半には使用痕があり、外面体部には黒色の煤が付着する。5は色調は灰白色、胎土は長石を含む粗雑なもので、内面体部から外面口縁部にかけて使用痕がある。6は色調は黄灰白色、胎土は長石を含む粗雑なものだが、やや砂質である。内面底部に弱い指圧痕、内面体部には若干降灰する。高台内側にのみ貼り付けに伴う回転ナデ、高台裏と底部中央に粗穀痕が残る。内面は底部中心以外に使用痕がある。7は色調は灰白色、胎土は長石を含む粗雑なもので、内面底部に指圧痕、内面底部と体部の境に若干の降灰がある。外面底部と高台裏には粗穀痕が残る。内面には使用痕が認められる。8は色調は灰白色、胎土は長石を含む粗雑なものだが、やや砂質である。体部は直線的に外に開く。内面底部には強い指圧痕がある。外面底部は高台は認められず、糸切痕がある。9は色調は灰白色、胎土は長石を含む粗雑なものである。内面底部のほぼ全面に弱い指圧痕がある。

陶器（図版5-10～20）

陶器は11点出土している。古瀬戸4点、大窯製品2点、近世陶器1点、常滑産が2点、加工円盤が2点である。10、11は古瀬戸の天目茶碗である。10は口唇部でゆるく乱れ、器壁は薄い。内外面とも黒褐色の鉄釉が施されている。12は古瀬戸の平碗である。内外面に淡緑色の灰釉がある。

施されている。13は古瀬戸の皿である。体部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口縁端部は垂直に立ち上がる。体部下半から底部にかけて回転ヘラ削り調整が行われる。内面から外面体部上方にかけて灰釉が施される。欠損しているが高台があったと思われる。14は丸皿である。内外面に茶褐色の鉄釉が施される。15は皿である。全面に淡緑色の灰釉が施されるが高台裏のみ拭いとられている。16は常滑窯製品の鉢である。内面は使用のため磨耗し、煤が付着する。時期は7～8型式期に比定される。17は常滑窯製品の壺である。頸部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は折り返しされて縁帶となる。18は常滑窯製品の壺である。口縁部には縁帶が形成され、外面頸部上端に密着する。内面口縁端部の膨らみは角張って内側へ若干張り出す。19・20は加工円盤である。19は天目茶碗の底部を加工したものである。天目茶碗の時期は古瀬戸後期～大窯1段階にあたると思われることから、加工した時期はそれ以後と考えられる。20は擂鉢を加工したものである。擂鉢は近世の瀬戸美濃産、いわゆる本業焼と思われる。

土師器（図版5-21～図版6-50）

土師器は30点出土している。すべて手づくねでつくられたものである。

30、37、42には黒色の煤が残る。灯明皿として使用されたものと考えられる。32は外面底部に墨書きで二文字認められる。破損のため判読は困難であるが、「□ん」と読むものと思われる。

瓦器（図版6-51、52）

瓦器は2点出土している。焼成は軟質で内面には煤が付着している。いずれも火鉢と考えられる。

輸入磁器（図版6-53～55）

輸入磁器は青磁2点（53、54）と白磁1点（55）の計3点出土している。

53は青磁碗である。外面体部に蓮弁文が刻まれる。54は器形は不明であるが、碗の体部である可能性もある。53と同様に何らかの文様が施されている。いずれも緻密な胎土の上に淡青色に発色する釉が掛けられている。焼成も良好である。

55の白磁は小型の杯と思われる。器壁は薄く、焼成は良好である。

瓦（図版6-56～図版8-70）

瓦は丸瓦4点、平瓦11点の計15点出土している。いずれも中世のものと考えられ、いわゆる燻し瓦で焼成はやや軟質気味である。

56～59は丸瓦である。タタキ調整の痕跡が明瞭に残る。60～70は平瓦である。60は焼成後に穿孔される。

金属製品（図版8-71、72）

金属製品は針金1点（71）、煙管1点（72）の計2点出土している。

71は銅製の針金である。使用形態は不明である。72は銅製の煙管の羅字部分である。全体に若干磨耗している。

木製品（図版8-73～84）

木製品は20点出土している。このうち箸が4点（73～76）、柱が1点（84）ある。その他のものは加工されており、何らかの製品の部分と思われるが詳細は不明である。

柱（84）は残存長1m10cm、長径39.2cm、短径26.5cmの柱根である。樹芯は2箇所。下部は工具による加工痕があり、下部側面には $5.0\text{cm} \times 4.8\text{cm}$ のほぞ孔が穿たれている。ほぞ孔は運搬の際に使用されたものと思われる。時期については、供出資料はないが、放射性炭素年代測定（第5章）によりcal AD 1355-1385年と推定されている。

第5章 自然化学分析

第1節 木製品の樹種

1. はじめに

ここでは、問う遺跡から出土した中世から近世の木製品20点の樹種同定結果を報告する。これらは包含層より出土し、製品の一部または部材で多くは用途不明であった。しかし、当地域一帯のこの時期における木材利用に関する情報はあまりないため、基礎的資料として樹種調査が実施された。

2. 試料と方法

材の横断面・接線断面・放射断面の3方向から薄片を片歯のカミソリで剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、材組織標本の永久プレパラートを作成した。そして、光学顕微鏡を用いて、40～400倍に材組織を拡大して観察した。

材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧を、表3に示した。

検出された分類群は、カヤ（1点）・クロマツ（1点）・マツ属（1点）・コウヤマキ（2点）・スギ（1点）・ヒノキ（4点、ヒノキ？も含む）・ヒノキ属（3点）・アスナロ（4点）・タケ亜科（2点、いわゆる竹類）、不明（1点）であった。

全体的には、ヒノキ科に属するヒノキとアスナロが多く検出された。

箸4点は、ヒノキ2点、コウヤマキとスギが各1点であった。

柱かと思われる材2点は、カヤとクロマツであった。カヤは長径39.2cm、短径26.5cmほどで、樹芯が2箇所あり2本の幹材が癒合した状態であった。癒合がゆるい方が下を向いて出土し、底部には鉈痕？の加工痕が見られた。幹部の太い方の横断面には、年輪が約16.5cmの間に100年輪ほどが数えられた。

以下に同定根拠とした材組織の観察結果を記載し、各分類群の材組織顕微鏡写真を提示する。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 写真図版3 1a-1c (No.84)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。仮道管に2本が対になるらせん肥厚があり、分野壁孔は小さなヒノキ型が2個ある。

本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、種子は食用となり油も取れ、材は水質に強く加工しやすい。

クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. 写真図版3 2a-2c (No.85)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。晩材の量は多く、垂直樹脂道はおもに晩材部にある。分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁の肥厚は全般的にアカマツほど先が鋭くならずなだらかである。

クロマツは暖帯から温帯下部に生育し、クロマツは海岸部に多く分布する。樹脂が取れ、材は耐久性が高い。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 写真図版3 3a-3c (No.76)

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は窓状で、放射組織は5細胞以下の背の低いものが多い。樹脂道は無い。

コウヤマキは日本特産の1属1種の常緑高木である。本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帶上部から温帯の山地に分布し、特に長野県の木曽、和歌山県の高野山に多い。材は耐久性・耐水性・耐蟻性に優れる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 写真図版4 4a-4c (No.75)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は多く、その仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大型で輪郭は水平方向に長軸を持つ楕円形、孔口が水平に大きく開いたスギ型、1分野に主に2個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 写真図版4 5a-5c (No.73) 6 (No.86)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、その仮道管壁も特に肥厚は目立たないものが多い。分野壁孔は大型で輪郭は円形、孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型、1分野に2~4個でおもに2個が水平に整然と配列する。

整理番号91は漆器膜に残存していた材組織で、1分野に2個ほどのヒノキ型の分野壁孔が観察された。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材はとりわけ耐久性・切削性・割裂性にすぐれている。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 写真図版4 7a-7c (No.79)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量はやや多く、肥厚も目立つ。分野壁孔はやや小型で輪郭は円形、1分野にヒノキ型が2～4個あり、分野壁孔の孔口はやや大きく開いているものが多い。ヒノキまたはサワラと思われるが分野壁孔が充分観察できないのでヒノキ属としておく。

ヒノキ属は温帯に分布し、本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に成育するサワラがある。サワラはヒノキに比べその材は、耐朽性・切削性・割裂性にやや劣る。

アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 写真図版5 8a-8c (No.87)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、年輪幅は狭い。分野壁孔は小型のヒノキ型、1分野に主に4個前後のものが多い。

アスナロは日本特産で1属1種である。本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用であるがヒノキよりやや劣る。

タケ亜科 Gramineare subfam. Bambusoideae イネ科 写真図版5 9a-9c (No.82)

厚みのある硬質の茎であり、維管束の配列が不整中心柱であること、維管束鞘が非常に発達している事から、いわゆる竹の茎部であることが判る。維管束の配列などに種類ごとの特徴は見られず、種類は特定できない。

4.まとめ

中世から近世では、木製品の多くが針葉樹から製作されるようになるが、当遺跡においても同様な傾向が認められた。特にスギよりも、ヒノキ科のヒノキやアスナロが多く検出された。柱材と思われるカヤは、樹齢100年以上あり、2本の幹が癒合したものが使われていた。また、もう1本の柱と思われる材はクロマツであった。柱のような大木の材からはヒノキが検出されなかつたことから、庶民階級の生活域では、製品化されたヒノキ材が流入する状況はあったが、ヒノキの大きな材が身近に入手できるような状況ではなかったのかも知れない。

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

寺跡遺跡より検出された木片の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、えー5グリッドから出土した木材（No.84カヤ）の年輪の外側部分より採取した木片1点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表4に、試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値（yrBP）の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、曆年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、 1σ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する曆年代範囲である。

カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代校正を行なった。暦年代校正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、 $\epsilon-5$ グリッドから出土した木材（No.84カヤ）の年輪の外側部分より採取した木片の年代はcal AD 1355–1385年が、より確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.
- Stuiver,M. and Reimer,P.J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215–230.
- Stuiver,M.,Reimer,P.J.,Bard,E.,Beck,J.W.,Burr,G.S.,Hughen,K.A.,Kromer,B.,McCormac,F.G.,v.d.Plicht,J.,and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000–0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041–1083.

第3節 動物遺体

1. はじめに

三重県桑名市の寺跡遺跡の発掘調査において検出された貝層より採取した土壌試料を用いて、動物遺体について分類・同定を行なった。

試料は、4mm・2mm・1mm 目のふるいを用いて水洗した。4mm・2mm 目ふるい上に残った試料は肉眼で、1mm 目ふるい上に残った試料は実体顕微鏡を用いて拾い出しをおこなった。

以下に貝類・魚類・両生類・爬虫類・哺乳類について説明する。

2. 貝類

今回分析した貝類試料は256点であり、その内容を表5に示した。ハマグリが最も多く出土し、ヤマトシジミとシオフキガイが出土する特徴を持つ。以下に主要な分類群について説明する。個体数については、二枚貝は殻頂の残存する個体を、巻貝は芯が2巻以上残存する個体を計数した。

ヤマトシジミ

ヤマトシジミは全体の12%を占める。

ヤマトシジミは河口の汽水域の砂中に生息しており、採取が容易であることから、一般的な食用貝類のひとつとされている。

ハマグリ

ハマグリは本遺跡から出土した貝類の中でもっとも多く、全体の80%を占める。

ハマグリは、日本周辺の沿岸域に広く分布し、潮間帯から水深20m前後の砂泥底に生息する。干潟などから採取できることから多くの遺跡で比較的多く産出する。ハマグリは、シジミと同様に比較的容易に採取することができ、一般的な食用の貝類のひとつである。

シオフキガイ

シオフキガイは全体の6.3%を占める。その殻高値は3～4cm前後である。

シオフキガイは、房総半島以南に分布し、潮間帯から水深20mの砂泥底に生息している。

キセルガイ類

キセルガイ類は4個体のみ出土している。

キセルガイ類は陸産巻貝であり、日本各地に分布している。生活様式は種により異なり、木に登る種と、落葉や石の間に棲む種とがある。

3. 魚類・両生類・哺乳類

今回分析した試料は、計13点であり、その内容を表6に示した。分析試料は非常に小さい為、種の同定にはいたらなかった。以下に各分類群について記載する。

魚類（種不明）

魚骨・椎骨・肋骨が各1点検出されている。魚骨はカサゴ目に近似しているが、現生標本20cmのものと比較してその大きさは1/4程度しかないこともあり、同定までいたらなかった。椎骨は破片であるため同定は出来ない。また、肋骨による同定は特徴的な形態を持つものでないと困難である。

カエル目

椎骨・肋骨・脛腓骨が各1点、上腕骨・桡尺骨が各2点の計7点検出されている。いずれも現生標本のウシガエルと比較して1/10程度と非常に小さくアマガエルのような小型の種類のものである。

ヘビ科

椎骨が1点検出されている。

ネズミ目

大臼歯が1点、尾椎が1点検出されている。大臼歯は現生標本のアルビノラットと同じぐらいのサイズである。

これらカエル類、ヘビ類やネズミ類が検出されている。これらは食材として廃棄されたものではなく、その場で自然死したものと考えられる。またカエル類の出土は、今回の試料採取地点は旧河川に近接する位置にあり、水辺に位置していたということからも自然死したと考えるのに矛盾しない。

4. おわりに

寺跡遺跡の貝層を分析した結果、その貝層はハマグリを主体とし、ヤマトシジミが随伴するものであった。

この貝層は試掘トレーンチより検出され、調査時の状況からは、人為的な貝層なのか、自然貝層なのかが不明であった。今回分析した結果、生息域の異なる貝類が出土していること、一般的な食用の貝類が90%以上を占めているという状況、貝層中に石器類や土器片が含まれていることから、この貝層は人為的なものであると考えられる。

謝辞

同定用の現生骨格標本は、国立歴史民俗博物館西本研究室の所蔵標本を観察させていただいた。また同定には西本研究室の太田敦子氏にご助力いただいた。ここに感謝の意を表する。

参考文献

吉良哲明（1954）「原色日本貝類図鑑（増補改訂版）」。保育社、pp.240。

渡部忠重・奥谷 司（1954）「学研生物図鑑 貝 II」。学習研究社、pp.294。

第6章　まとめ

今回の調査は桑名市公共下水道敷設事業のうち、大福幹線江場五丁目末端汚水管路施設工事によって破壊される部分について、立会調査を行ったものである。

発掘区は幅1m、深さ約1.6～2.5mと狭長かつ変則的であるうえに、掘削深度に制限があったが、結果的に寺跡遺跡のほぼ中心にトレーチを掘削するかたちとなったため、遺跡の性格等の把握においてその成果は大きい。本章ではその成果の一端を紹介し、調査のまとめとしたい。

出土遺物と遺跡の年代

本遺跡からは100点を超える遺物が出土しているが、細片が多く、年代が正確に把握できるものは数少ない。編年が確立しており、年代をある程度おさえることのできる山茶碗や陶器類から遺跡の年代を類推することとする。

山茶碗は主に東海地方で生産された日常雑器と考えられるもので、本遺跡から出土したのは粗雑で灰白色を呈する胎土をもつ、いわゆる荒肌手と呼ばれる東海地方南部系のものである。これらは藤沢良祐の山茶碗編年の第4～8型式に概ね該当するが、の中でも12世紀中葉に比定される第4型式から、13世紀前葉に比定される第6型式にかけてのものが比較的多く確認できる。

その他、14～16世紀頃の古瀬戸、常滑窯製品、瀬戸美濃大窯製品や舶載品の青磁、白磁等が若干出土している。

これらにさかのぼる時期の遺物の出土はみられなかった。また、近世に属する遺物の出土もごくわずかであった。

以上から、本遺跡は概ね12世紀中頃から16世紀頃にかけて存続していたようで、その盛期は12世紀中頃から13世紀中であったと考えられる。14世紀以降は徐々に廃絶に向かっていき、17世紀に至り土地利用が為されなくなったと思われる。

検出された遺構と「寺跡」伝承

遺構はC、G、I地点で検出された。

C地点では地表面より2.5mで礎石らしき礎が1基検出された。掘削深度に制限があったため、全容を明らかにすることはできなかったが、中世の遺物包含層にバックされた状態であったことから、中世もしくはそれ以前の建物に伴う礎石であると思われる。

また残存長110cm、長径39.2cm、短径26.5cmを測る木製の柱が、暗青灰色粘質土層（5層）の上面にて垂直に立った状態で検出された。この柱は近世の遺物包含層である5層を貫き、中世の遺物包含層であるさらに下層の6層ないしは7層に打ち込まれていたものと考えられる。どの面から打ち込まれたかが不明なため、遺構からは年代がはつきりしないが、放射性炭素年代測定（第

5章)によりcal AD 1355–1385年のものとの結果を得ている。これは前述した出土遺物の年代とも大きくずれることはなく、中世もしくは近世の建物遺構に伴う柱の可能性が高い。柱の規模から比較的大型の建物であったことを窺い知ることができる。

G地点では地表面から2.9mとなる8層の上面にて6基の柱穴、I地点では土坑1基、溝1条、溝に沿った横板を伴う杭等をそれぞれ検出した。いずれも中世の遺物包含層にパックされており、中世もしくはそれ以前の遺構と考えられる。

いずれの遺構も掘削していないため、時期などの詳細は不明であるが、土層の堆積状況、また、遺物包含層からの遺物出土状況等から、中世の遺構である可能性が高い。

さて、本遺跡を含む桑名市大字大福寺跡には、かつて大福田寺と呼ばれる寺院があったと伝承される。近世の地誌類によると、大福田寺は17世紀中頃に現在地の桑名市大字東方に移転し、大字大福寺跡は大福田寺の移転前の所在地とされる。これは地名がその根拠となっているようであるが、「大字大福寺跡」という地名がいつ付けられたものか、検証できる資料は今のところ見つけられない。

大福田寺の創建はやはり地誌類によると、鎌倉時代までさかのぼるとされる。僧忍性がその開基とされ、大福田時には重要文化財である紙本墨書歎進状附絹本着色忍性上人像が伝わるが、これ以外に忍性との直接的な関連を示す資料は今のところ見つかっていない。

前述の遺構は中世にさかのぼり得るものであり、大型の柱や礎石は何か特別な建築物に由来することを連想させる。また、中世のものと考えられる瓦が一定量出土していることも非常に示唆的であると思われる。しかし、現時点ではまだ大福田寺と寺跡遺跡を結び付ける根拠には至らないと思われる。さらなる資料の蓄積を待って検討を加えていきたい。

調査地の環境について

調査地は自然科学分析によって当時の様相がある程度明らかになった。これは寺跡遺跡の立地及び成立と展開を考えるうえで有益な情報であることは言うまでもなく、揖斐・長良川河口部の沖積地における遺跡の成立と展開を考えるうえでも重要な情報と考えられよう。ここでは特にH地点の6層(貝層)より採取したサンプルの分析結果を基に、当時の環境を考えてみたい。

H地点からは、貝を多量に含む青灰色粘質土層(6層)が検出された。こらは、さらに下層である有機質の暗青灰色粘質土層(7層)に掘り込まれた土坑の埋土にも見えたが、小規模なトレンチであるため、現時点では6層の性格は不明と言わざるを得なかった。そこで、壁面より土壤サンプルの採取を行い、サンプル内に含まれた動物遺体の同定を通して6層の性格を明らかにすることとした。

なお、立会調査の性格上、定量サンプルを採取することができなかつたため、任意のサンプル一概ね32.5cm×25.0cm×10.0cmのタッパー2箱分である。

同定の結果、全体の90%以上がハマグリ、ヤマトシジミ等の食用の貝であることが明らかとなった。環境と遺跡の存続期間を考えるうえで特筆されるのはカエル目、ヘビ科、ネズミ目等が検索されていることである。これらは食用として採集されたものではなく、その場で自然死したものと考えられる。カエル目の出土は調査地付近に水辺が広がっていたことを裏付けるものであり、ヘビ科、ネズミ目、また、陸産の巻貝であるキセルガイ類の出土は、6層もしくは7層の上面が比較的長期にわたって、利用されていたことを窺い知ることができるものである。

参考文献

- 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982
藤澤良祐「古瀬戸概説」『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』土岐市美濃陶磁歴史館 1984
藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館 1986
藤澤良祐「本業焼の研究（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館 1987
藤澤良祐「本業焼の変遷（2）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館 1988
藤澤良祐「本業焼の変遷（3）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII』瀬戸市歴史民俗資料館 1988
藤澤良祐「本業焼の変遷（4）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要IX』瀬戸市歴史民俗資料館 1989
藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館 1991
中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をめぐって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1994
桑名市教育委員会『桑名市遺跡詳細分布地図』1995

觀察表

報告書番号	地区名	層位・遺構	器種名	法量(cm)			軸裏	備考
				口径	底径	器高		
1	うー5		山茶碗 梅	—	8.0	—	4型式、12世紀中葉、モミガラ痕、降灰、内面底部使用痕、内面底部煤付着	
2	えー5		山茶碗 梅	—	(8.0)	—	4型式、12世紀中葉、モミガラ痕、使用痕	
3	うー5		山茶碗 梅	—	—	—	4~5型式、12世紀中葉~後葉	
4	うー5		山茶碗 梅	—	(6.7)	—	5型式、12世紀後葉、指圧痕、モミガラ痕、外面部煤付着	
5	うー5		山茶碗 梅	—	—	—	5~6型式、12世紀後葉~13世紀前葉	
6	いー5		山茶碗 梅	—	6.7	—	6型式、13世紀前葉、指圧痕、モミガラ痕、降灰	
7	うー5		山茶碗 梅	—	(5.0)	—	6型式、13世紀前葉、モミガラ痕、指圧痕、降灰	
8	いー5		山茶碗 梅	12.9	5.7	4.7	8型式(13世紀後葉)、指圧痕	
9	うー5		山茶碗 小皿	(8.4)	(5.6)	—	7~8型式、13世紀中葉~後葉	
10	うー5		陶器 天目茶碗	—	—	—	鉄軸 古瀬戸後期	
11	かー6		灰褐色粘質土層破砕貝混 陶器 天目茶碗	—	—	—	鉄軸 古瀬戸後期第IV型式、15世紀後半	
12	うー5		陶器 平碗	—	—	—	灰軸 古瀬戸	
13	おー6	貝層	陶器 盆	(10.3)	—	—	灰軸 古瀬戸後期第I・II型式、14世紀後葉	
14	おー6	暗青色シルト層	陶器 丸皿	(10.2)	—	—	鉄軸 大窯Ⅲ段階以降	
15	えー6		陶器 盆	—	—	—	灰軸 瀬戸美濃、内外面施釉	
16	うー5		陶器 花	—	—	—	常滑、7~8型式期、14世紀、内面体部煤付着	
17	えー6		陶器 壺	—	—	—	常滑、9型式期、15世紀代	
18	かー6		灰褐色粘質土層破砕貝混 陶器 壺	(39.6)	—	—		
19	えー6		陶器 加工円盤 直径4.0	—	—	—	鉄軸 天目茶碗(古瀬戸後葉~大窯Ⅰ)を加工	
20	えー6		陶器 加工円盤 直径4.1	—	—	—	鉄軸 握鉢(本製焼)を加工	
21	いー5		土師器 盆	(13.0)	—	—	手づくね	
22	おー6	柱穴2	土師器 盆	(12.7)	(5.0)	—	手づくね、内外面に煤付着	
23	いー5		土師器 盆	(12.5)	(7.1)	(3.1)	手づくね	
24	うー5		土師器 盆	(12.1)	(5.5)	—	手づくね	
25	うー5		土師器 盆	(11.5)	(5.1)	1.9	手づくね	
26	うー5		土師器 盆	(11.1)	(5.0)	—	手づくね	
27	うー5		土師器 盆	(10.9)	—	—	手づくね、磨耗	
28	うー5		土師器 盆	(10.7)	(6.4)	—	手づくね	
29	いー5		土師器 盆	(10.6)	(6.6)	—	手づくね	
30	いー5		土師器 盆	(10.4)	(6.2)	—	手づくね、内外面口縁部油漬付着	
31	うー5		土師器 盆	(9.8)	(4.0)	—	手づくね	
32	いー5		土師器 盆	(9.5)	(7.0)	—	手づくね、外面底部に墨書き「〇ん」、内面底部磨耗	
33	うー5		土師器 盆	(9.2)	(5.8)	—	手づくね	
34	うー5		土師器 盆	(7.9)	(4.2)	1.6	手づくね	
35	いー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
36	うー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
37	いー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね、内面体部煤付着	
38	うー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
39	いー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
40	うー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
41	うー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
42	いー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね、内外面口縁部油漬付着	
43	うー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
44	うー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
45	いー5		土師器 盆	—	—	—	手づくね	
46	おー6		土師器 盆	—	—	—	手づくね、磨耗	
47	かー6		土師器 盆	—	—	—	手づくね	

表1 遺物観察表(1)

報告書番号	地区名	層位・遺構	器種名	法量(cm)			軸薦	備考
				口径	底径	器高		
48	いー 5		土師器 盆	—	—	—		手づくね、内外面口縁端部磨耗
49	うー 5		土師器 盆	—	—	—		手づくね
50	うー 5		土師器 瓢	—	—	—		伊勢型瓢、外面堤付看
51	うー 5		瓦器 次鉢	—	—	—		内面削り後縫方向にナデ
52	うー 5		瓦器 火鉢	—	—	—		
53	おー 6 柱穴 3		青磁 瓢 (15.2)	—	—	—		龍泉窯系
54	うー 5		青磁 瓢	—	—	—		龍泉窯系カ
55	うー 5		白磁 小坪	—	—	—		16世紀
56	えー 5		瓦 丸瓦 厚さ1.9					
57	うー 5		瓦 丸瓦 厚さ2.0					
58	うー 5		瓦 丸瓦 厚さ1.7					
59	うー 5		瓦 丸瓦 厚さ1.1					凸面ナデ、凹面横方向ナデ
60	いー 5		瓦 平瓦 厚さ1.5					工具によるナデ、焼成前穿孔(直径1.1cm)あり
61	うー 5		瓦 平瓦 厚さ1.7					凹面目後縫方向ナデ、凸面横方向へら削り後櫛目状に工具痕一部縫方向ナデ
62	うー 5		瓦 平瓦 厚さ1.7					凹面縫方向ナデ、凸面斜め方向に調整後ナデ
63	うー 5		瓦 平瓦 厚さ1.2					凹面横方向に削り後縫方向にナデ、凸面横方向に削り後横方向に櫛目状の工具痕後一部縫方向にナデ
64	うー 5		瓦 平瓦 厚さ1.6					工具によるナデのちへら切りのちナデ
65	うー 5		瓦 平瓦 厚さ2.0					凹面横方向へら削り後縫方向ナデ、凸面斜方向櫛目状の工具痕
66	うー 5		瓦 平瓦 厚さ1.9					布目
67	いー 5		瓦 平瓦 厚さ1.6					凸面斜方向櫛目状の工具痕、磨耗
68	いー 5		瓦 平瓦 厚さ1.6					
69	えー 5		瓦 平瓦 厚さ2.0					布目
70	いー 5		瓦 平瓦 厚さ1.9					凸面縫方向ナデ、磨耗
71	うー 5		金属製品 钵金 長さ19.7、直径0.1					片方の先端1.5cm程磨耗して尖る。
72	うー 5		金属製品 球管(灘豆) 長さ4.35、幅1.4、厚さ1.2					
73	いー 5		木製品 箸 全長14.6、直徑0.5					
74	いー 5		木製品 箸 全長12.2、直徑0.45					
75	いー 5		木製品 箸 全長13.4、直徑0.6					
76	いー 5		木製品 箸 全長13.3、直徑0.4					
77	いー 5		木製品 不明 長さ5.2、幅1.5、厚さ0.7					
78	うー 5		木製品 不明 長さ5.0、幅6.0、厚さ1.2					
79	えー 6	暗黒褐色粘質土層	木製品 不明 長さ14.3、幅1.0、厚さ0.2					
80	うー 5		木製品 不明 長さ19.3、幅1.0、厚さ0.6					
81	えー 6		木製品 不明 長さ11.4、幅1.0、厚さ0.5					
82	うー 5		木製品 不明 長さ7.9、幅1.3、厚さ0.4					
83	うー 5		木製品 不明 長さ15.1、幅1.1、厚さ0.3					
84	えー 5	暗青灰色粘質土層上面で検出	木製品 柱力 全長110、直径36.5、孔長さ6.0、孔幅5.0					
85	えー 6		木					
86	うー 5		木製品 不明					漆の被膜
87	えー 6		木製品 不明					板状
88	えー 6		木製品 不明					断面三角形
89	えー 6		木製品 不明					板状
90	えー 6		木製品 不明					一面のみ平らに加工
91	いー 5		木製品 不明					木の皮？達？
92	えー 5		木製品 不明					一面のみ平らに加工

復元について()で示した。

表2 遺物観察表(1)

遺物番号	地区名	層位・遺構	器種名		樹種	備考
76	いー5		木製品	箸	コウヤマキ	
75	いー5		木製品	箸	スギ	
73	いー5		木製品	箸	ヒノキ	
74	いー5		木製品	箸	ヒノキ	
84	えー5	暗青灰色粘質土層で検出	木製品	柱か	カヤ	直径39.2cm、短径26.5cm、2本の幹が融合 約100年輪、底部に加工痕
88	えー6		木製品		アスナロ	棒状
87	えー6				アスナロ	
89	えー6		木製品		アスナロ	年輪緻密な板目板材
90	えー6		木製品		ヒノキ属	年輪緻密な板目板材
77	いー5		木製品	不明	ヒノキ	
81	えー6		木製品	不明	コウヤマキ	
79	えー6	暗黒褐色粘質土層	木製品	不明	ヒノキ属	
82	うー5		竹製品	不明	タケ亜科（竹類）	
80	うー5		木製品	不明	アスナロ	枝材の一部利用か
83	うー5		竹製品	不明	タケ亜科（竹類）	
78	うー5		木製品	不明	ヒノキ属	板目板材
91	いー5		木製品	不明	不明	木の皮？漆？
86	うー5		木製品	不明	ヒノキ？	漆の皮膜
92	えー5		木製品	柱か	マツ属	
85	えー6		木製品	丸木	クロマツ	直径20cm、20年輪以上あり

表3 木製品の樹種同定結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代	
				曆年代較正值	1σ 曆年代範囲
PLD-1979 (AMS)	木片 (カヤ) No.84柱か (えー5グリッド)	-20.8	670 \pm 45	cal AD 1295	cal AD 1285-1315 (46.0%) cal AD 1355-1385 (54.0%)

表4 放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果

採取地区・地点			H地点 貝層サンプル2	H地点 貝層サンプル1	計
巻貝類					
キセルガイ科 Clausiliacea				4	4 (1.56%)
二枚貝類					
シオフキガイ <i>Mactra veneriformis</i>			L R	2 1	7 6
ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i>			L R	6 9	5 11
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>			L R	34 24	81 66
計				76	180
					256 (100.00%)

表5 試料別貝類出土量

部位			H地点 貝層サンプル 2	H地点 貝層サンプル 1	計
ネズミ科 Muridae	下顎第1大臼歯	左	1		1
	尾椎		1		1
魚類	椎骨		1		1
	魚骨	右	1		1
	肋骨			1	1
ヘビ科 Colubridae	椎骨		1		1
	椎骨	破片		1	1
	肋骨			1	1
カエル目 Salientia	上腕骨	左		1	1
		右		1	1
	桡尺骨	左		1	1
		骨幹部		1	1
	胫腓骨	右		1	1
	計		5	8	13

表6 試料別骨出土量

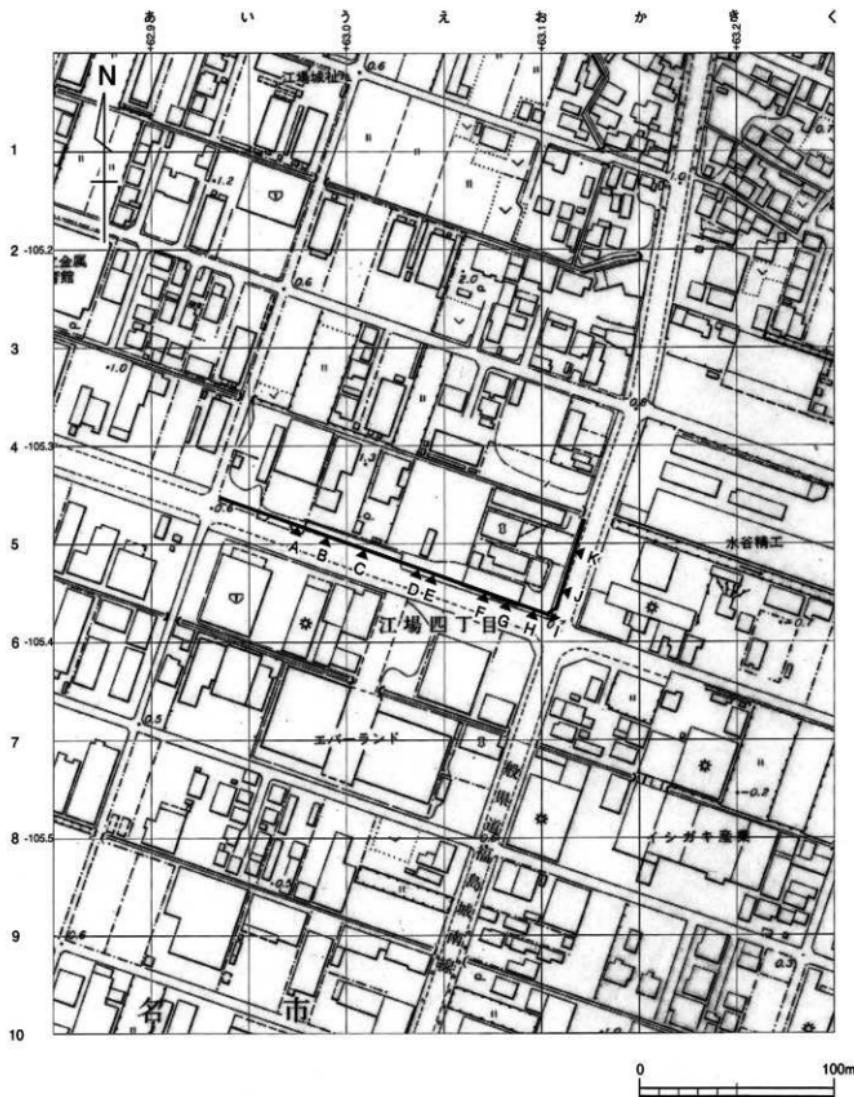
図版



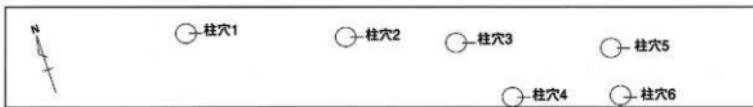
図版1 調査地点位置図 (1:25000)

0

1km



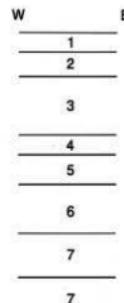
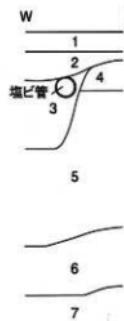
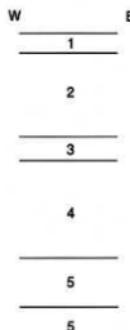
図版2 調査区位置図 (1 : 2500)



G地点プラン図 (1 : 50)



I地点プラン図 (1 : 50)



- 1 砂石・アスファルト
- 2 棕褐色土層 硫混 (現代の盛土)
- 3 暗灰色粘質土層
- 4 暗灰褐色粘質土層 砂混
- 5 灰色砂層

- 1 砂石・アスファルト
- 2 黄白色土層
- 3 棕褐色砂層 (現代の盛土)
- 4 灰褐色土層 硫多混
- 5 暗灰褐色粘質土層 砂混
- 6 暗灰褐色粘質土層 砂混(鉄分多)
- 7 青灰色粘質土層

- 1 砂石・アスファルト
- 2 黄白色土層
- 3 棕褐色砂層 (現代の盛土)
- 4 青灰色砂層 (3層退元)
- 5 暗青灰色粘質土層
- 6 暗灰褐色土層 砂混 (鉄分多)
- 7 青灰色粘質土層

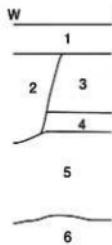
A地点断面図 (1 : 50)

B地点断面図 (1 : 50)

C地点断面図 (1 : 50)



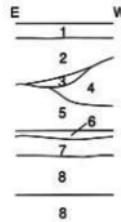
図版3 調査区平面・土層断面図



- 1 砂石・アスファルト
- 2 青灰色砂層
- 3 暗褐色土層 やや粘質
- 4 暗褐色砂層 やや粘質 (3層還元)
- 5 暗黒褐色粘質土層 有機質
- 6 暗黒褐色粘質土層 貝混 有機質
- * 5層 松葉・松笠が多量出土



- 1 砂石・アスファルト
- 2 橙褐色土層
- 3 カクラン ガラ入り
- 4 暗褐色粘質土層 有機質
- 5 暗褐色粘質土層
- 6 暗褐色粘質土層 松葉・松笠多混
- 7 暗褐色粘質土層 (鉄分多)
- 8 暗褐色粘質土層



- 1 砂石・アスファルト
- 2 茶褐色土層 硫・砂混
- 3 暗青灰色粘質土層
- 4 瓦層・ガラス片混 (桟瓦)
- 5 暗褐色粘質土層 (有機質)
- 6 暗褐色粘質土層
- 7 暗褐色粘質土層 (鉄分多)
- 8 暗褐色粘質土層

D地点断面図 (1 : 50)

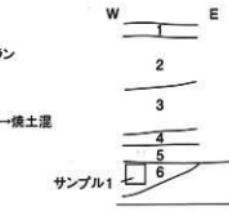
E地点断面図 (1 : 50)

F地点断面図 (1 : 50)

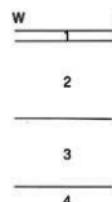
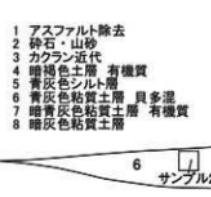


イブツ ——7
—8

G地点断面図 (1 : 50)

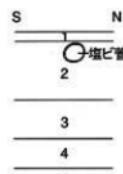


H地点断面図 (1 : 50)



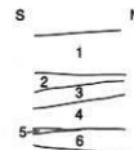
- 1 砂石・アスファルト
- 2 カクラン
- 3 暗褐色粘質土層 砂層
- 4 暗褐色粘質土層

I地点断面図 (1 : 50)



- 1 砂石・アスファルト
- 2 カクラン
- 3 暗灰褐色粘質土層 砂混
- 4 暗褐色粘質土層 破碎貝 多混

J地点断面図 (1 : 50)

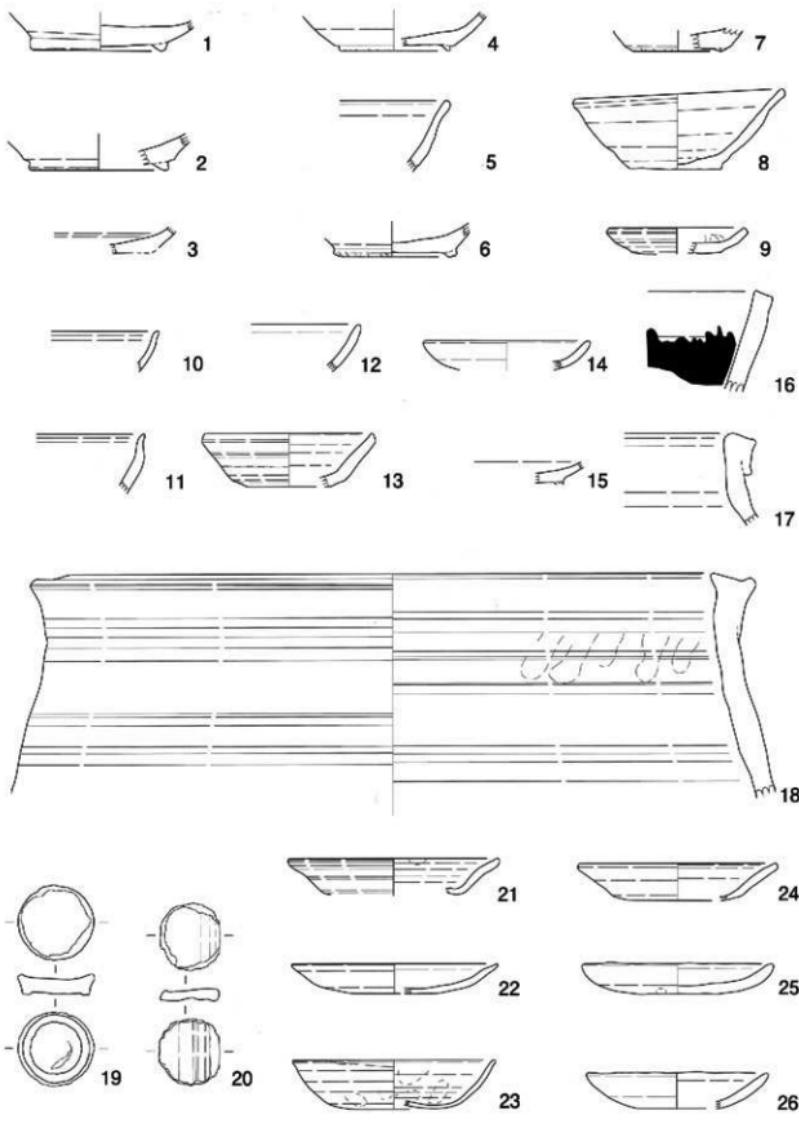


- 1 アスファルト カクラン
- 2 山砂
- 3 カクラン
- 4 暗灰褐色土層 破碎貝 (2枚貝) 多混
- 5 暗褐色シルト層 砂混
- 6 暗白色砂層
- 7 暗褐色粘質土層 (ベース?)

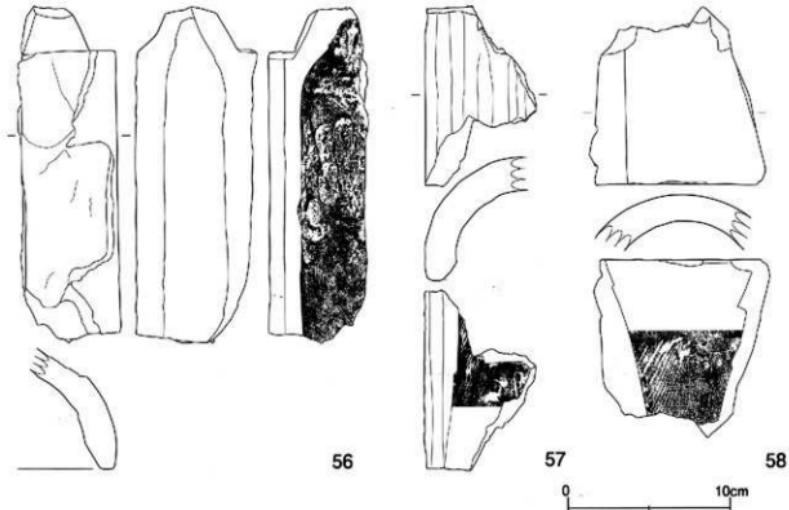
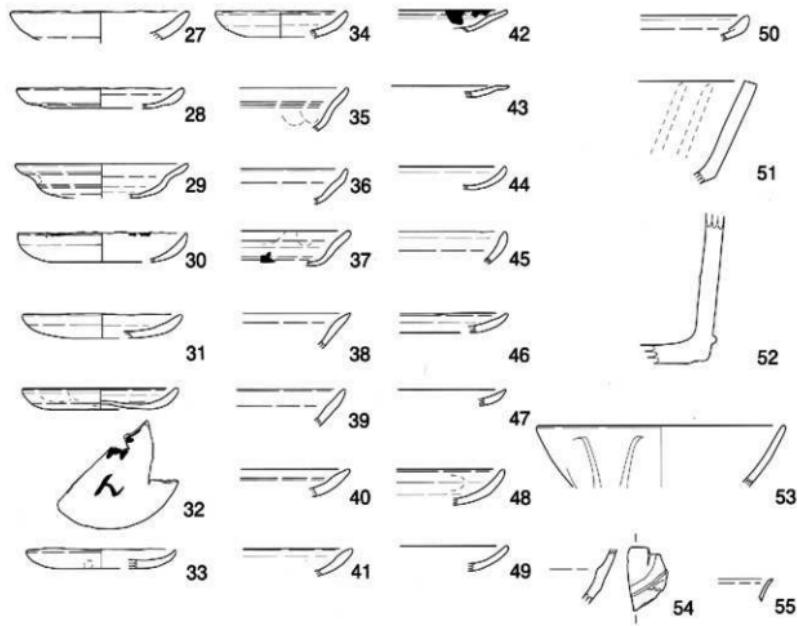
K地点断面図 (1 : 50)



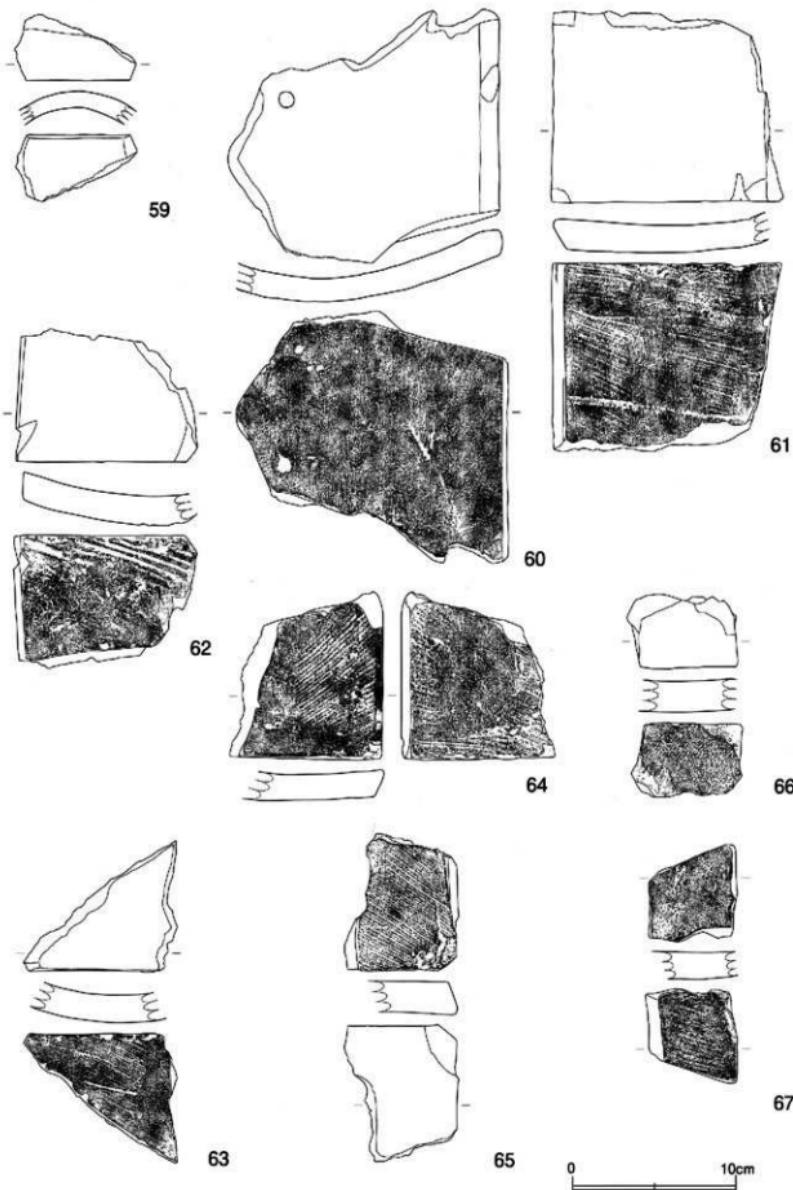
図版4 調査区土層断面図



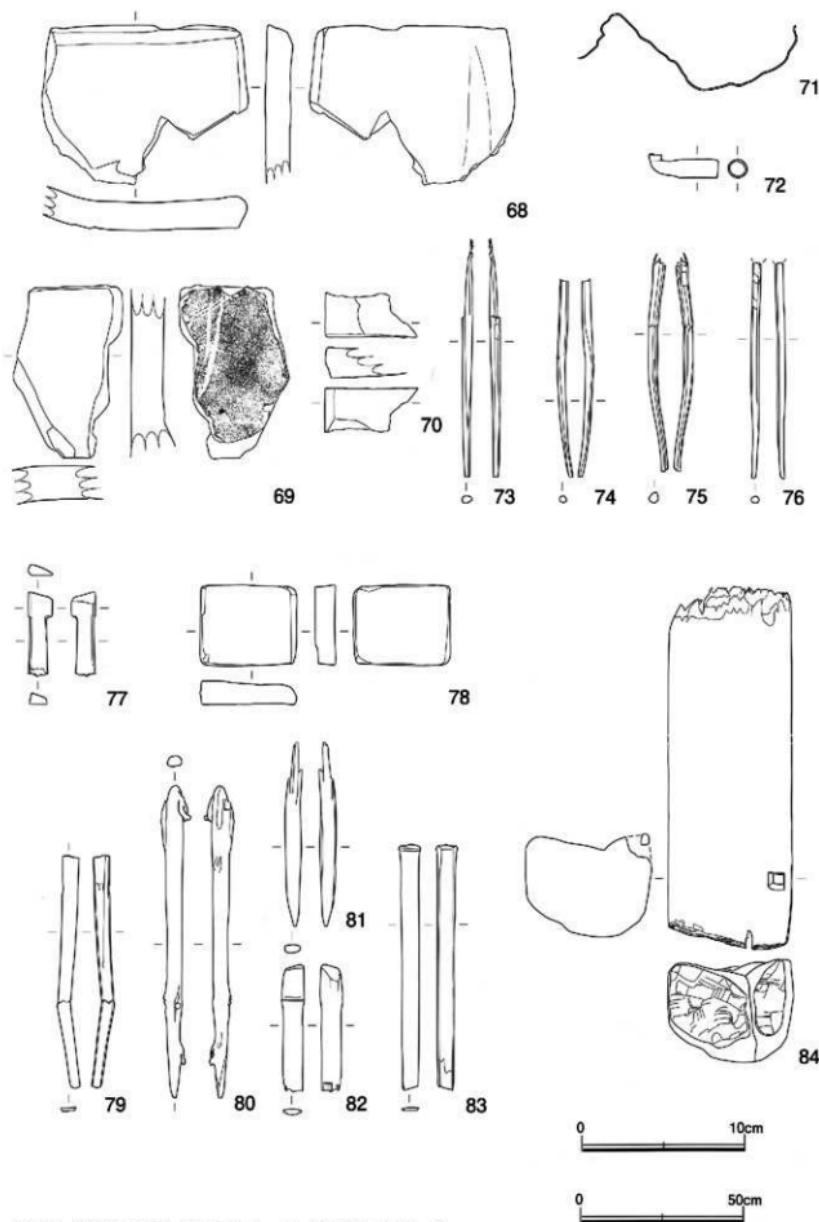
図版5 遺物実測図 (1 : 3)



図版6 遺物実測図 (1 : 3)



图版7 遗物実測図 (1:3)



図版8 遺物実測図 (84のみ1:15 他はすべて1:3)

写真図版



カラー写真図版1



カラー写真図版2



調査前近景



K地点 調査区断面



B地点 調査区断面



C地点 硬石



H地点 調査区断面



作業風景



J地点 調査区断面



作業風景

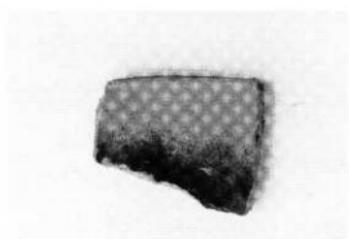
写真図版1 調査区、調査区壁、遺構



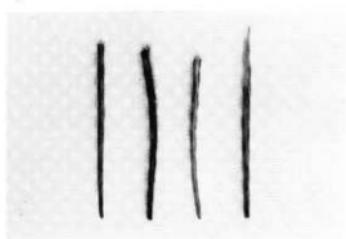
出土遺物（8）



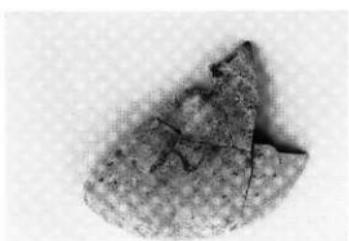
出土遺物（72）



出土遺物（16）



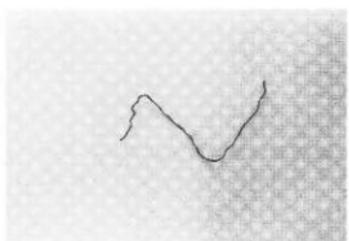
出土遺物（左から76、75、74、73）



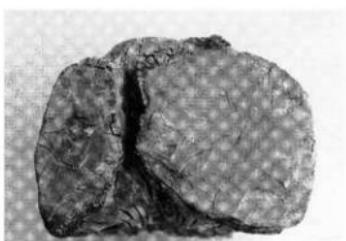
出土遺物（32）



出土遺物（84）

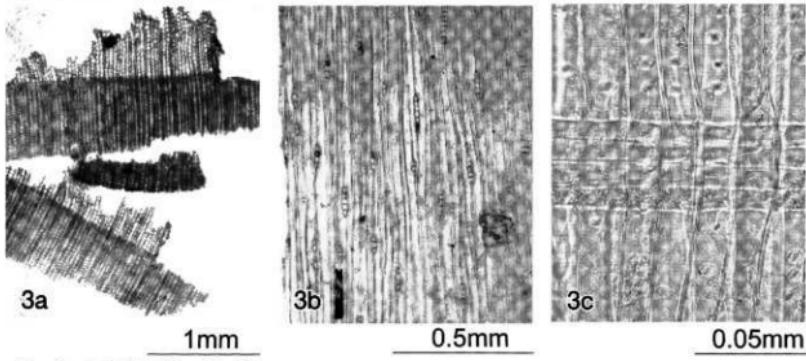
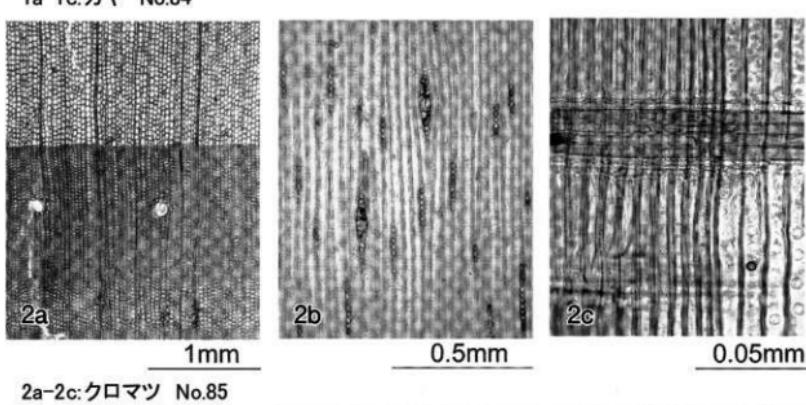
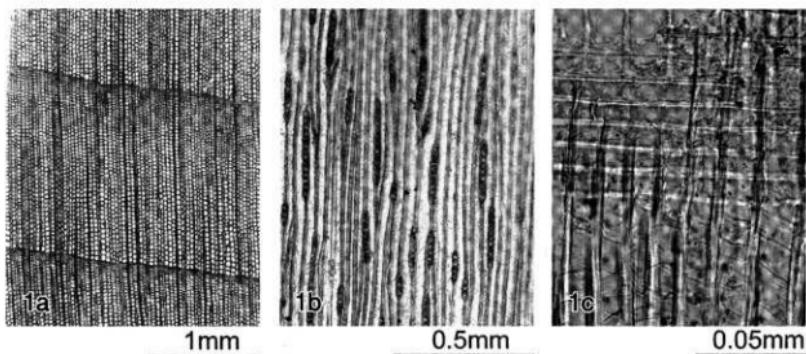


出土遺物（71）

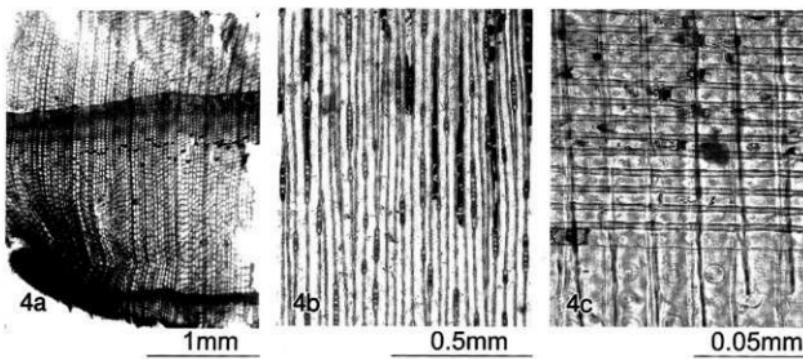


出土遺物（84）

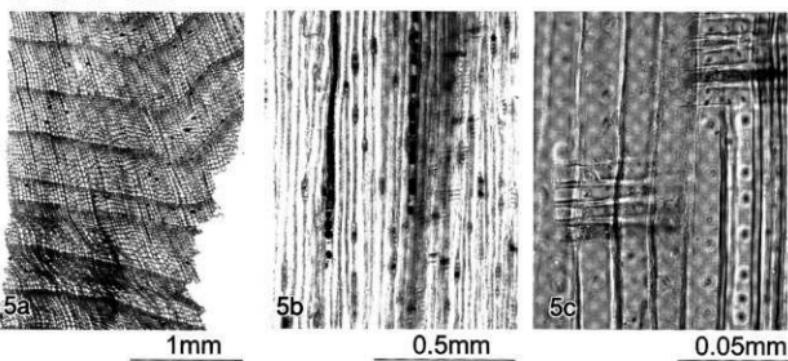
写真図版2 出土遺物



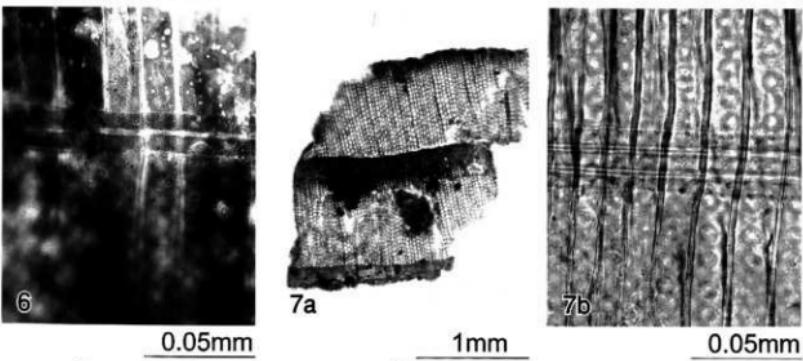
写真図版3 木製品樹種の光学顕微鏡写真



4a-4c:スギ No.75



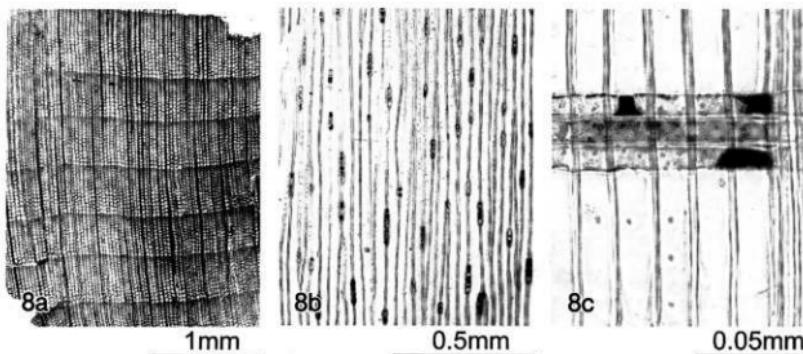
5a-5c:ヒノキ No.73



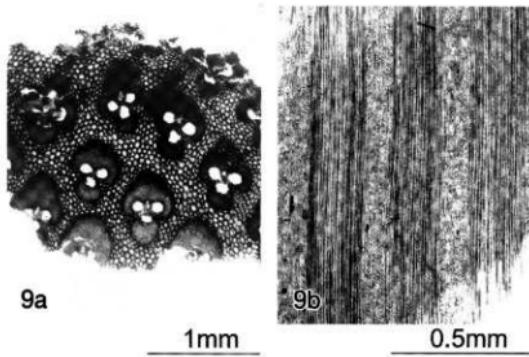
6:ヒノキ? No.86

7a-7b:ヒノキ属 No.79

写真図版4 木製品樹種の光学顕微鏡写真

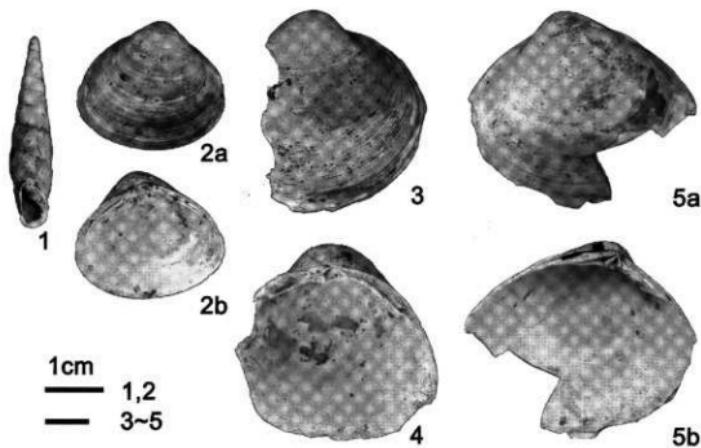


8a-8c: アスナロ No.87



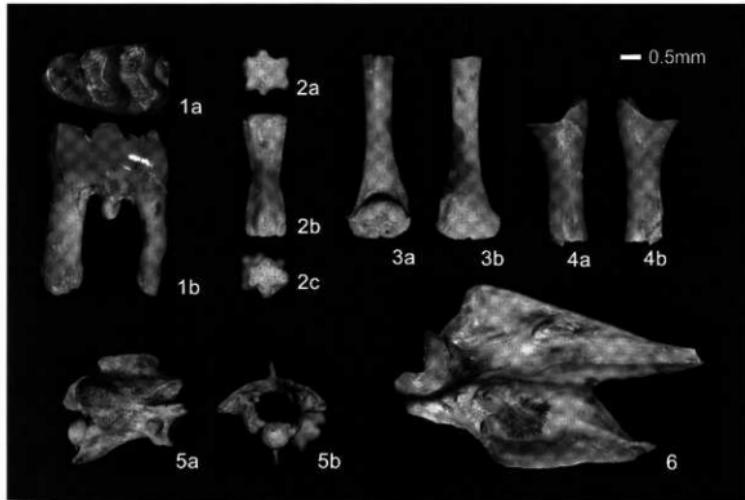
9a-9b: タケ亜科 No.82

写真図版5 土木製品樹種の光学顕微鏡写真



写真図版6 貝類

1. キセルガイ類 2. ヤマトシジミ 3,4. シオフキガイ 5. ハマグリ



写真図版7 動物遺体

1. キセ 1.ネズミ科 左下顎第1大臼歯 2. ネズミ科 尾椎 3.カエル目 橫尺骨
4. カエル目 橫尺骨 5. ヘビ科 椎骨 6.魚類（種不明）魚骨

報告書抄録

ふりがな	てらあといせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	寺跡遺跡発掘調査報告書						
副書名	桑名市公共下水事業敷設事業大福幹線江場五丁目末端汚水管路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査						
編著者名	齊藤理、水谷芳春、平野亜紀、植田弥生、山形秀樹、黒澤一男						
編集機関	桑名市教育委員会						
所在地	511-8016 三重県桑名市中央町二丁目37番地 TEL0594-24-1361						
発行年月日	西暦2004年3月10日						
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
てらあといせき 寺跡遺跡	くわなしおおあだ いふかぎてらあと 桑名市大字 大福字寺跡 418-2番地先	No.130	35° 3'	136° 41'	20020905 ~ 20040331	183.20 m ²	下水道工事 (末端汚水管 路施設工事)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な構造		主な遺物	特記事項	
寺跡遺跡	散布地	鎌倉～江戸	土坑 溝 礎石 柱穴		山茶碗 古瀬戸 土師器 瓦 木製品		

三重県桑名市
寺跡遺跡発掘調査報告書
桑名市公共下水事業敷設事業大福幹線
江場五丁目末端汚水管路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
2004年3月10日
編集・発行 桑名市教育委員会